活動に欠かせない「モノ」から
その効果と未来の可能性を探る

助成団体のなかには、独自の「モノ」を使って活動したり、活動の過程で新しい「モノ」を生み出す団体があります。今回は、そんな「モノ」に着目して、その成果とこれからについて担当者に聞きました。

CLOSE UP 注目のヒト・モノ・コトをお伝えします

特定非営利活動法人 丸瀬布昆虫同好会（まるせっぷ）

北海道紋別郡遠軽町　https://www.maru-mushi.com/

活動名

武利及び丸瀬布地区に「虫のいえ」をつくろう

副理事長　**浅利 誠**さん

虫のいえ

中に入れている木材は地元の山から切り出したもの

自然豊かな丸瀬布地域には多くの虫が生息しているが、そこに暮らす子どもの多くが虫に触れないのだという。ゲームに熱中して外遊びが少ないのは、都会の子も田舎の子も同じなのだ。子どもたちに身近な虫に関心を持ってほしい、虫を素手で触れるようになってほしい。そんな発想から誕生したのが「虫のいえ」だ。

虫のいえは、虫が巣にしやすいように枠のなかに木や植物を入れたもの。前例がないため試行錯誤の繰り返しで、平日は4、5人、休日は10人ほどで2か月かけて1棟目の形ができ、最後に子どもたちが中に木や竹、わらなどを詰めて完成させた。「わいわいアイデアを出し合いながら楽しく作業した」と浅利さんは振り返る。

4か月後、子どもたちと一緒に中の木を取り出して観察したところ、「ハサミムシ」「ハチ」「ワラジムシ」など7種88匹の虫が確認できた。初めは嫌がって遠くで見ていた子どもも、他グループの「いたー!」という声に刺激を受け、自ら木を持って虫を探すようになった。「見つけたときの笑顔が最高だった」と浅利さんは言う。

これまでに4棟の虫のいえが完成し、この春にもう一棟建設予定だ。虫を入り口にして身の回りの豊かな自然を体感し、自然を守り地域で生きる子どもを育てたい。それが浅利さんたちの目標だ。

子どもと一緒に観察。新しい木より古い木に多くの虫がいたため、子どもたちから「もっと傷んだ木が欲しい」と声が上がった

特定非営利活動法人 地球市民の会

佐賀県佐賀市　http://terrapeople.or.jp/main/

活動名

モリンガを活用した緑化と循環型農村作り（ミャンマー）

プロジェクトマネージャー　**柴田 京子**さん

モリンガ加工品

「モリンガシードオイル」（左）と「モリンガティー」（右上）。オイルはオレイン酸が豊富で美容オイルとして人気があり、お茶はデトックス作用が期待できるという

モリンガの木

今事業3年間で、村人や僧院学校の生徒など280人が植林に参加した

長年ミャンマーで植林事業を続けてきた同会では、植えた後の管理ができず枯れてしまうことが少なくないという問題を抱えていた。そんなとき、自生しているため成長に問題がなく、かつ換金もできる「モリンガ」の存在を知り、植林を決めた。換金できる木ならば、植林後の管理も継続できるだろうと考えたのだ。

今事業ではこれまでに3万本以上ものモリンガを植えてきた。昨年度は約90kg収穫し、そこから「モリンガティー」「モリンガパウダー」を約10kg、「モリンガシードオイル」は30ml瓶約100本を生産。主にヤンゴン市内の外国人向け土産店で販売した。

モリンガは昔からミャンマーに自生していたものの、これまではあまり注目されてこなかった。しかし同会の研修を通じて、地域住民の間でモリンガにとても栄養があり、環境保全にも役立ち、さらに換金できるということが広く知られるようになった。その結果、地元でモリンガ植林に対する意識が高まり、自主的に植林するケースも増えているという。「今後はミャンマーの地元の人にも市場を広げ、モリンガから安定した収入を得られるようにしていきたい」と語る柴田さん。今以上に住民の植林への意欲が強まり、モリンガで持続可能な植林が進むことが期待される。

モザイク

花モザイク。福島県南相馬市原町共生授産園で製作

南三陸大型花モザイクの製作現場。材料は現地調達できる大理石などのほか、被災住宅の木材やがれきもリサイクルして活用。被災地の「過去」と「未来」をつなげる役割も果たしている

茨城県高萩市役所正面前に設置したモザイク。緻密な技術に裏打ちされた高い芸術性、手作りの温かみ、高い耐久性が評価されている

特定非営利活動法人 エコ平板、防塵マスク支援協会

千葉県柏市　http://eco-heiban.com/

活動名

モザイクによるシルバーと障碍者参加の被災地環境整備

理事長　**橋田 隆明**さん

「モザイク」は廃材の石やレンガ、瓦などを細かく砕き、板にはったもので、街路や公園、建物の床や壁面などに使用される。東日本大震災で被災した福祉作業所が新たな活動を模索していたとき、同会から震災がれきや被災地で採取できる材料を使ったモザイク製作を提案した。

モザイク製作の担い手は、被災地のシルバー（高齢者）と障碍者だ。「モザイク製作は特殊な技術や才能を必要とするものではない」と橋田さんは言うが、人が歩く通路や建物の壁面などに使われるものである限り、工業製品（JIS規格あり）としてのレベルを満たす必要がある。「福祉製品だから仕方がない」という考えではなく、品質管理を重視して事業として成り立つよう努めているという。

今事業ではこれまでに障碍者65人、シルバー15人がモザイク技術を習得した。製作物は良質で味わいある街づくりや人にやさしい環境づくりで被災地の復興に貢献している。「モザイク製作で障碍者の可能性を引き出し、障碍者も街づくりに参画する社会の重要な人的資源だと認識してもらえるようにしたい」と橋田さんはその展望を語る。

きんたい米

“きんたい”とは、高安地域で古くから使われてきたニッポンバラタナゴの地域名称。米袋にもしっかりニッポンバラタナゴの写真が印刷されている

特定非営利活動法人 ニッポンバラタナゴ高安研究会

大阪府八尾市　http://n-baratanago.com/

活動名

高安の里におけるニッポンバラタナゴの生息環境を保全するための地域づくり

代表理事　**松浦 義彦**さん

魚の保護・研究活動からなぜ米が生まれるのか。その答えはニッポンバラタナゴの生息地にある。

絶滅危惧種ⅠA類のニッポンバラタナゴは、主に里山のため池に生息する。保護にはため池の健全な維持管理が必須で、現在6つの保護池を管理しているものの、管理できる数には限界がある。ならば池の水を利用する農家の人たちにため池を管理してもらい、ため池の水を利用して育てた米をブランド化する。魚の保護と農業の活性化の両立を狙ってできたのが「きんたい米」だ。

きんたい米の現在の生産農家は3軒で、年の収穫量は約10トン。同会の会員向けに販売するほか、八尾市内の自然食販売所やイベント時におにぎりとしても販売している。収益は魚の保護活動に役立てるだけでなく、同会が農家から直接購入・販売してコストを削減し、より多くの利益を農家に還元している。米の評判は上々で、少しずつ注文は増えているが、ため池の水を利用する農家が限られているため、今すぐ増産を望むのは難しい。松浦さんは「きんたい米が地域ブランドとして確立されれば、生産農家が増え、ニッポンバラタナゴが生息するため池に付加価値がつく。それにより放棄されたため池が保護池へと生まれ変わり、ニッポンバラタナゴの保護につながっていけばと考えている」と期待を語る。

みんなで握った“きんたいおにぎり”